# シュリー・クリシュナの神聖な性質

### 2013年8月18日

### シュリー・クリシュナ生誕祝賀会　午前の部

### スワーミー・メダサーナンダによる講話

### 於・逗子協会

「なぜ神様が宇宙を創ったのか、『ウパニシャッド』の中に面白い理論があります。絶対の真理である神様は唯一の存在ですが、一人では寂しいし遊ぶこともできません。遊ぶには様々な生き物やいろいろな物が必要です。そこで神様は宇宙を創造されたのです。これは「遊びのセオリー（theory of play）」または「リラー（Lila）」と呼ばれており、ヒンドゥー教独特の考え方と言えるでしょう。

神様は、形のないこともあれば形のあることもあります。形のないのは、絶対の真理ブラフマンです。形があるときは、特別な場所に住んでいらっしゃいます。それが天国です。天国には、クリシュナの天国（Krishna-loka）、イエスの天国（Jesus-loka）、お釈迦様の天国（Buddha-loka）など様々な天国があり、そこでは悟りを得た高潔な人々が一緒に暮らしています。

私たちの世界では人の性質は様々です。ふざけるのが好きな人もいれば、信仰心のない人もいます。神様は人の姿を取ってこの世界にやって来て、いろいろな人と様々な遊びを楽しむのです。

『バガヴァッド・ギーター』の中に、次のような大変有名な二節があります。「無宗教の者、非道徳的な者が増えたとき、私（神）は生まれ、宗教の教えを説く。また、悪者を殺し私の信者を守り導くために、私は生まれる」しかし、ここでは遊びについて触れられていません。一方、『バーガヴァタム』には神様の遊びについて書かれています。遊びは、神様がこの世界に生まれてくる大きな理由の一つです。いつも天国にいてはあまり面白くありませんから、この世界に来て、信者と共に歌ったり踊ったり話したりし、神様を信じていない人を信仰へと導き、信仰の浅い人を信仰の深い人に変えるのです。これが、神の化身がこの世界に生まれてくる理由です。

ヒンドゥー教において、シュリー・クリシュナは神様の十の化身の一人と言われていますが、神様の化身には二四あるとか、化身は無限にあるとか解釈されることもあります。これまでの神様の化身の中で、シュリー・クリシュナはヒンドゥー教徒に最も人気があります。

なぜでしょうか。クリシュナの生涯は大変ドラマティックで面白く、幼少期から亡くなるまで様々な興味深いエピソードがあるので、皆シュリー・クリシュナの物語を読むのが大好きなのです。

いくつかクリシュナのエピソードをお話ししましょう。クリシュナは牢屋で生まれました。自分の命を狙う悪王カンサから逃れるために、クリシュナは牢屋にいる父ヴァスデーヴァに対し、ゴークルにいる王ナンダと王妃ヤショーダーの間に生まれた女の子と自分をすり替えるように指示しました。すると、ヴァスデーヴァをつないでいる鎖がほどけて看守が居眠りを始め、牢屋の扉が開きました。激しく降る雨のためヤムナー河は水位が大変高く、ヴァスデーヴァはクリシュナの身をどうやって守ろうかと心配しましたが、突然、たくさんの頭を持つヘビが現れて首をフードのように大きく広げ、赤ん坊のクリシュナを雨から守ったのです。このように、クリシュナは使命を担った聖なる存在ですから、ただ願うだけで自然や生物が助けに来てくれるのです。そしてヤムナー河の水が割れて、ヴァスデーヴァらは河を歩いて渡ることができました。ヴァスデーヴァは赤ん坊を交換すると、ヤショーダーの産んだ赤ん坊を連れて牢に戻りました。こうして見てみると、シュリー・クリシュナの物語は生まれたときから実に興味深いことが分かります。そしてこのようなエピソードがとてもたくさんあり、何度聞いても決して飽きません。

また、シュリー・クリシュナには様々な面があり、多才です。例えば、クリシュナはあらゆる聖典を知っており、哲学者です。『バガヴァッド・ギーター』や『バーガヴァタム』にはクリシュナの深い霊的な教えが書かれており、これらを読めばクリシュナが哲学者として実に偉大であることは疑いようもないことが分かります。クリシュナには、神性が最も大きく現れていました。また、偉大な戦士でもあり、『マハーバーラタ』を読むと偉大な政治家であることも分かります。さらに、愛情深い息子、師らを敬う賢い生徒、思いやりのある兄弟、優しい友人、溢れる愛を持つ夫でもありました。そして、偉大な師でもありました。理想主義者でありながら、現実の問題を巧みに解決できました。

再び『マハーバーラタ』の話となりますが、これを読むとクリシュナの実践的な知恵の素晴らしさに驚きます。クリシュナのおかげで、パーンダヴァ一族はクルクシェートラの戦いに勝利します。クリシュナは偉大な戦士でしたが自らは戦わず、パーンダヴァ一族に助言を与えて導いただけでした。クリシュナの性格には正反対の面もたくさん見られます。例えば、ついさっきまで普通の人間だったかと思うと、突然神性が現れるのです。この点はシュリー・ラーマクリシュナの生涯にも共通して見られるもので、信者が困惑するところです。シュリー・クリシュナは大変優しく、同時に大変厳しい方でした。「花のように柔らかく、雷のように力強い」方でした。

クリシュナは友達を大変愛していましたが、いつ何時でも執着を捨てることができました。ある瞬間非常に愛着を感じていても、次の習慣には気持ちを切り離すことができたのです。クリシュナに、愛情と無執着の素晴らしいコンビネーションを見ることができます。私たちは人や物に愛着を強く持つと手放せなくなりがちですが、これは問題です。一方、僧侶の中にはただ冷淡かつ無執着で何の感情も見せない人がいますが、これは理想とは言えません。望ましいのは、愛情と無執着を意のままに切り換えられることで、シュリー・クリシュナにはこれができたのです。またクリシュナは、ある瞬間は大いにふざけていても、次の瞬間にはとても真面目になります。こうした正反対のように見える性質を備えていたことが、シュリー・クリシュナ独特の個性であり、面白くて惹きつけられる点です。

お釈迦様には詳しい伝記がありませんが、仏像を見ると概して真面目な性格が想像されます。もちろん、お釈迦様は慈悲深く優しいお方ですが、楽しく遊んでいる物語はまったくありません。ラーマチャンドラにも楽しい面はあまり見られません。キリストの場合もそうです。これに比べて、シュリー・クリシュナには楽しい面がたくさんあります。真面目なだけの人はつまらないですし、楽しさだけを求める人は浅薄なことがあります。

ヴィヴェーカーナンダにも楽しい面と真面目な面の両方の性質がありましたし、その師のシュリー・ラーマクリシュナもそうでした。さっきまで信者らと冗談を言っていたかと思うと、急にサマーディに没入し、信者らは皆静まり、周囲は針の音が聞こえるかと思うほど静かになるのです。そしてラーマクリシュナが通常意識に降りてくると、再び神様の歌や踊り、話でその場が賑やかになるのです。

シュリー・クリシュナはまた、様々な霊的理想を体現していました。信仰の実践においては、いろいろな形の霊的理想があります。例えば、神様を我が子のように愛する形です。私たちは子供を愛していますから、同じ態度で神様を愛することができます。信者の中にはクリシュナを赤ん坊と見なして礼拝する人がいます。また、神様に対するのと同じ態度で我が子に接することもできます。子供の世話をするときに、本当は神様のお世話をしているのだと考えるのです。我が子やすべての子供の中にクリシュナを見てください。これも霊的悟りを得る方法の一つです。

クリシュナを兄弟と見なしたり、友人と見なしたりして神様を礼拝することもできます。クリシュナの物語の中に、男の子の友達がたくさん出てきますが、クリシュナを親友と見なして神様を礼拝する面が表れています。また、クリシュナを師と見なして神様を礼拝することもできます。『ラーマーヤナ』にハヌマーンとラーマの物語がありますが、この関係がそれにあたります。『バガヴァッド・ギーター』では、アルジュナはクリシュナが単なる友人ではなく師であると理解しています。

クリシュナを恋人と見なすこともできますが、これは極めて高次の理想で、難しい道です。ですから、肉体意識が全くなく真に純粋とならない限り、この道を選ばない方がよいでしょう。クリシュナの物語に、クリシュナに夢中になっているゴピー（乳搾り女）らが出てきます。皆、夫や家族がいるのですが、クリシュナを神と見なして深く敬愛しているのです。これを婚外恋愛だと思われてしまうことがあるのですが、本当は極めて純粋なものなのです。ゴピーらのクリシュナへの愛には肉体意識も肉欲も全くありません。だから、クリシュナを恋人と見なして神を礼拝することができたのです。

このようにシュリー・クリシュナは、信者が神様を人間と見なした場合の様々な関係を体現していました。一方、その生涯の物語には、神性を最も体現した面も記述されています。

シュリー・クリシュナがどれほど多くの人々に今なお影響を与えているか、例えば『バガヴァッド・ギーター』を考えてみただけでも分かります。『ギーター』は世界中の諸言語で出版されており、日本語だけでも翻訳版が6～7種類あります。『ギーター』は19世紀まではインドにしかありませんでしたが、英語に翻訳されてからシュリー・クリシュナが世界中で知られるようになりました。中世にペルシャ語の翻訳版が出版され、そこからヨーロッパの数か国語に翻訳されたものの、英語版が登場したのはそのずっと後で、これはサンスクリットから直接翻訳されました。エマーソンやショーペンハウアーなど数多くの欧米の哲学者が『ギーター』の影響を受けました。

あるとき僧侶がスワーミー・サラダーナンダジに、「なぜ『バガヴァッド・ギーター』がこんなにも高く評価されるのでしょうか」と尋ねました。サラダーナンダジが「他に『ギーター』のような聖典があれば、挙げてみなさい」と言うと、僧侶は答えられませんでした。聖典はどれもみな大変重要ですが、『ギーター』は、普遍性、合理性、霊性が非常に高く、調和の精神に貫かれているという点で特別です。三千年近く前に編纂されたのに、その内容には現代においても通じるものがあり、非常に人気があるというのはすごいことではないでしょうか。

では、シュリー・クリシュナの人間的な面と神的な面とが表れている物語をいくつかお話ししましょう。皆さんも自分で『ギーター』や『バーガヴァタム』を読んでみてください。この2冊は大変重要で、皆さんの人生を豊かにしてくれるでしょう。

シュリー・クリシュナの肌は青か黒で描かれていますが、「クリシュナ」という言葉は実は「黒」という意味です。しかし青い肌で描かれることも多いのです。この理由は、青も黒も無限を表す色だからです。空は青いですね。海の色は深いところだと青にも黒にも見えます。このように、この2色は自然界の相対的な無限を表す色なのです。しかし、空に近づくと色がなく、海の水を手にすくうと色がないことが分かります。神様には色という有限性の面を持つ一方、無限でもあるのです。同様に、クリシュナはある面では形がありますが、クリシュナに近づいていきクリシュナ意識に合一すると形がないことが分かります。

「信者のハートを耕す者はクリシュナである」という言葉がありますが、「耕す」ことで何が収穫できるのでしょうか。信仰心、純粋さ、親切心、愛などです。クリシュナが私たちのハートを耕すと、これらが育ちます。ブッダやキリスト、シュリー・ラーマクリシュナの場合と同様です。これはクリシュナの神性の象徴です。

さてお話をしましょう。クリシュナは大変ないたずらっ子でした。私はよくお子さんのいる方から、子供のいたずらに手を焼いていると聞きますが、クリシュナの幼少時代の物語を読めば、自分の子供ははるかにおとなしい子だと思うでしょう。クリシュナの育った地方には、乳搾り女や牛飼いがたくさん住んでいて、バターやクリーム、ヨーグルト、バターミルク、様々なお菓子などを作っていました。クリシュナの両親は裕福で、食べ物や乳製品に事欠くことはありませんでしたが、クリシュナはそれで満足しませんでした。友達と一緒に出かけては、近所の家からバターなどを盗み、サルに与えたりしていました。最後には、器まで壊してしまったのです。村の女性たちは、クリシュナの母・ヤショーダーのところにしょっちゅう文句を言いに来ました。「クリシュナをちゃんと監督してちょうだい。言うことを聞かないなら、縛ったらどうなの」

当然ヤショーダーは怒り、幼いクリシュナを叱りました。「どうしてご近所から盗むの？うちにはたくさんあるでしょう？ご近所の壺まで壊すなんて！」クリシュナは、自分はやっていない、近所の人は自分を嫌っているから作り話をしているんだと答えました。あまりに腹が立ったヤショーダーは、クリシュナを縄で縛ろうとしますが、何度やってみてもその度に縄の長さが足りず、もっと長い縄が必要でした。どれほど縄の長さを足しても、わずかに短くて縛れないのです。ヤショーダーが疲れ果てているのを見て、クリシュナは、いたずらっぽい笑みを浮かべながら、自分から縛られたのです。この話の裏にあるのは、クリシュナの無限性です。無限な存在を縛ることなど誰にできるでしょうか。ヤショーダーがいくら縄を足しても、クリシュナを縛ることはできないのです。そのことに憐れみを感じ、無限のクリシュナは自ら有限になったのです。神の化身の中には、有限と無限の二面が見られます。神の面、人間の面がさっと入れ替わるのです。

幼子クリシュナは裕福で食べ物に困っていませんでしたが、土を口に入れることがよくありました。これを見てヤショーダーは、口の汚れを拭おうとしましたが、クリシュナは抵抗し、口を開けてヤショーダーに泥を取らせませんでした。ヤショーダーが無理矢理クリシュナに口を開けさせると、口の中に全宇宙が見えました。しかも、自分がその中にいるのも見えたのです。ヤショーダーは大変驚きましたが、次の瞬間、クリシュナは普通の子供に戻りました。シュリー・クリシュナは神様ですから、全宇宙が口の中にあるのです。私たちは宇宙の中におり、宇宙は私たちの中にいません。クリシュナの場合は、自身が宇宙の中にいながら宇宙もクリシュナの中にあったのです。